

「医療貢献と MR のあるべき姿」

皆吉広幸（ファイザー株式会社 兵庫四国医薬支店 徳島営業所）

にこにこ笑って立っている事で、やり過ごしていた MR の時代は、過去に消えようとしています。

私は現在の会社に新卒で入社し、かれこれ 20 年目となります。入社当初、MR という名称は定着しておらず、「プロパーさんどうぞ！」という呼び声に、戸惑いの笑顔で何度も会釈をしていた事を思い出します。とにかく、会社がおろしてくる情報を漫然と伝える事でやり過ごし、頭を下げていました。そうして経験を積み重ねるうち、私は MR 活動の難しさに少しずつ気付き始めました。それは人の生死を含めた真剣なやり取りが、医師の向こう側に存在していると感じる様になったからです。「あの薬はいいですよ！この薬はダメですよ！」等の安易な営業的情報に罪悪感をもつこともありました。しかしながら、自分の行動に対する答えもありませんでした。

その頃、私は MR としてはおとなしい方であり、接待という営業的手法を苦手としていました。しかしながら、年を重ねる度に、慣れと当時の競合会社との押し合い圧し合いの中で、いつの間にか接待を肯定的に行っていました。なぜなら、医師との面談は親身に聞いてもらわなければ、単なる一方通行の会話で終了し徒労に終わるからです。つまり、当時、接待はこの業界でも、面談を成功させる為の手取り早い方法だったという事です。

そんな時代が何年か続いた後の 2000 年あたりから、「医療貢献」という言葉を耳にするようになりました。私は「医療貢献」という言葉に正義感を感じ、ふつふつと自分なりの答えを探そうと思いました。医療貢献とは何かを考え、単純に医療連携のお手伝いができればと行動に移した時がありました。

2001 年、私は所属する営業所全体に関わる救急医療研究会の立ち上げのサポートに力を注ぎました。当時、救急医療のたらい回し事件が社会問題となっており、所属する営業所や担当エリアにおいても同様の問題がありました。そこで、私はある先生に話を持ちかけ、「医師、救急隊、その他の医療従事者の方を集め、活発な討議や発展的な講演の行える場所を提供する事で、救急医療のチームワーク体制の円滑化を促せるのではないですか？」との提案をしました。

その提案は 200 名を超える多くの参加者とともに、先生方からも好評価をいただき実施に至りました。

その後、私は転勤のため第 2 回目からは後任者に引き継ぎをしましたが、近年まで継続していたと聞いております。世話人をしていただいた多くの先生方に感謝しておりますが、特に、集中治療室の激務でお忙しい中、立ち上げ当初から懇意に話を聞いていただけました、担当エリアのお二人の先生には大変お世話になり、言葉にできない程感謝しております。ただ、自分の中で納得のいく医療貢献をしたとの思いと、この研究会は「医療貢献」のほんの一部であり、常に新たな課題が世に押寄せている…私はそこに MR 活動の限界を感じていた事を覚えています。

そして時は流れ、私もベテランと呼ばれ、若手を育成する年頃となり、気づき始めたことがあります。ここ最近の IT 関連の目覚ましい発展とともに、面談を苦手とする若者が少し増えていると気づき始めたのです。メールやネット等、コミュニケーションのツールとして様々なものを駆使することに問題はありますが、その反面、直の面談を疎かにする人が散見される様に感じます。

そのことを切掛けに、私の「医療貢献」に関する考え方は、一つの大筋を捉えることになりました。「医療貢献」の本質は、患者様と医薬品を繋ぐ事であり、市民フォーラムや医療連携の会合のサポートなどの目を見張るような企画・発案をする事だけではないと考えました。結局、日常の実直な活動によって、大雑把ではなく丁寧な情報活動することだと感じるようになりました。つまり、一つ一つの医療機関に対して、その医薬品に対する必要な情報や疑問を、タイムリーかつ分かり易く伝えることだと考えました。そして、それが患者様の利益に繋がると考えたのです。

医師は非常に多忙なことが多く、そのような状況下では、MR の羅列的な情報、メールやネットを介した情報は、右から左に消えていく事も多いだろうと感じます。我々MRはその状況を打破するために、医師の関心と状況を理解した上で、活動する必要があると感じています。つまり、それは「洞察力」や「人間力」を駆使したコミュニケーション能力と「正確な医学知識」だと考えます。

私の考えをまとめると、「研ぎ澄まされた洞察力と人間味あふれた誠実な行動で、信頼関係を構築しながら、幅広い医学知識により、医薬品を真の理解へ導く人」、この当たり前の行動こそがこれからの新しい MR 像であり、本来あるべき姿だと考えます。そして、この実直な行動を全ての MR がする事で、人の「健康」という「医療貢献」に繋がるのだと考えております。